

主 論 文 要 旨

報告番号	① 乙 第	号	氏 名	竹 内 優 志
主 論 文 題 名				
Perioperative Risk Calculator Predicts Long-Term Oncologic Outcome for Patients with Esophageal Carcinoma (食道癌患者における周術期リスクカリキュレーターによる長期予後予測の検討)				
(内容の要旨)				
<p>食道癌は男性において日本で6番目に死亡率が多く、悪性度の高い癌である。基本的な治療戦略として手術可能であればリンパ節郭清を伴う食道切除術が推奨されるが、その侵襲度の高さゆえ術後合併症率も高い。そのため、NCDデータを用いて術後短期予後を予測するrisk calculatorが作成された (Takeuchi H, et al. Annals of Surgery 2014;260:259–266)。また、食道癌においては、術後合併症が長期予後に影響を与えるという研究も散見されており、術後短期予後を予測するRisk calculatorを用いて長期予後予測が同様に可能か検討した。2000年7月から2016年6月までに食道癌に対して胸部食道全摘術を施行した患者438人を対象とした。手術は右開胸もしくは胸腔鏡下食道全摘術を行い、背景、長期予後に関して検討を行った。Risk calculatorの計算式に沿って30日死亡率、周術期死亡率を計算したところ、それぞれ平均1.22 ± 4.25 % / 3.03 ± 4.37 % だった。そこでClassification and regression trees (CART) を用いて各々のcut off値を設定したところ、Risk calculatorにおける30日死亡率 >0.675 % および周術期死亡率 >4.931 % で全生存に関して有意差を認めた。また、単変量解析で同様に有意差を認めた因子である年齢、cStage、術後合併症の有無を含めて多変量解析を行ったところ、Risk calculatorは有意な死亡危険因子であった (ともに$p < 0.001$)。さらに無再発生存に関しても30日死亡率 >0.594 % および周術期死亡率 >2.467 % が多変量解析において有意な再発危険因子となった。</p> <p>これらの結果から、食道癌術後短期死亡率を予測するRisk calculatorを用いて長期予後予測が可能であると考えられた。</p>				